

次号予告

特集 急性期心肺疾患の理学療法・作業療法

急性期呼吸障害の医学的管理……………	羽曳野病院	木村 謙太郎
急性期心筋梗塞の医学的管理……………	福井循環器病院	三船 順一郎
急性期心筋梗塞の理学療法……………	福井循環器病院	奈須田 鎮雄
急性期心筋梗塞の作業療法……………	国立別府病院	児玉 俊一・他
急性期呼吸障害の理学療法		

(レスピレーター離脱を中心として)……………都養育院病院 高島 耕

とびら……………九州リハビリ大学校 橋元 隆

講座 PT・OT のためのマイコン入門

3. ハードウェア (2)……………労災義肢センター 鈴木 祥生

障害学概論 3. 機能・形態障害学 (1)……………横浜市立大学 大川 嗣雄

プログレス 車椅子の最近の進歩……………国立身体障害者リハビリセンター 木村 哲彦

PT・OT の挑戦 身障スポーツの発展に力を尽くす ……筑波大体育学系 中川 一彦

あんてな 精神科におけるコンピューターを利用した

外来通院者のフォローアップ……………西川病院 内田 又功

編集後記

元来医療は我々人間を病(やまい)の苦しみから開放するために存在したはずであるが、近代医学の発展の中でとかく人間は、生物学的対象としてとらえられ、救命という考えがあまりにも強調されすぎて医学教育も軌道修正が必要になって来ているようである。

早期発見による治癒率も向上し、治療法も進歩したとはいえ癌患者の中には不幸な転帰をたどる方がまだまだ多い時代に我々は生きている。そのような患者に“Cure”は不可能であっても“Care”は出来るはずであり、いわゆる生きることの質 (quality of life) へのアプローチになるとこれはリハビリテーション医療の本質そのものである。

我が国では病名告知、特に癌に関しては論議が起こっているが告知しない率の方がまだまだ高いようである。それが果して良いのかどうかは神のみぞ知るといわざるを得ないが世界でもまれな我が国の宗教的背景と大いに関係が出て来そうである。すな

わち宗教的バックボーンがないし宗教家が病院で常勤している習慣もないために医療の側が悩むことが多い。

患者にも当然知る権利はあるという考え方も当然出て来るであろうし、その時期などについても意見はまちまちである。このような問題を色々の角度より常に考えておられる郷地氏に“癌患者を治療する際の病名に関して”というテーマで御執筆を戴いた。癌でなくても最近は数多い難病(特定疾患)に罹患して居られる患者に接する機会の多い PT・OT の方々にとって参考になるところ大である。更に専門家の方々にリスクという点でも御執筆を戴く事が出来た。今後増えることが予測される Stoma 患者の管理についても御参考にして戴きたい。この雑誌で癌を特集としてとりあげたのははじめてであり、このテーマの責任を持たされた者として編集後記をまとめるにも不安と期待が混在している。読者の皆様の御意見、御経験など編集部まで御寄せ戴ければ幸いである。(荻島 秀男)

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院名誉院長

五 味 重 春
埼玉県障害者リハビリセンター所長

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院名誉院長

津 山 直 一
東京大学教授整形外科

水 野 祥太郎
川崎リハビリ学院長
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
ペインリハビリテーション
クリニック高島平
整形外科

大喜多 潤
兵庫県リハビリセンター

寺 山 久美子
都心身障害者センター

富 岡 詔 子
信州大学医療技術短大

奈 良 勲
金沢大学医療技術短大

福 屋 靖 子
筑波大学

松 村 秋
都養育院リハビリ部

<編集同人>

池 松 洋 子

伊 東 元

岩 崎 テル子

宇都宮 初 夫

金 子 誠 喜

鎌 倉 矩 子

木 村 信 子

菊 地 延 子

小 嶋 裕

斎 藤 みち子

鈴木 明 子

高 橋 正 明

田 口 順 子

橋 元 隆

古 川 宏

松 沢 博

宮 崎 和 子

宮 前 珠 子

山 田 貞 雄

矢 谷 令 子

(担当 細田・西塚)